

保育者養成における「運動遊び」の教授内容・方法の実際

－ 運動遊びによる保育・発達支援の充実にむけて －

金川 朋子* 中村 泰介**

Contents and methods of teaching "motor play" in childcare worker training

－ For the enhancement of childcare and developmental support using motor play －

Tomoko Kanagawa Taisuke Nakamura

本研究では、保育士養成課程において、「運動あそび」の教授内容、方法を調査し、運動遊びによる保育・発達支援の充実にむけて取り組んだ。結果、学生の課題に対応し、実技指導では、ボール、フープ、なわとびを使用し、保育現場の現状を踏まえた取組みが明らかになった。

保育者養成校授業では、保育現場の実践を視野に入れた内容が取り組まれており、運動遊びに求められる「運動の楽しさ」を学生が実感できるように工夫され、学生が「運動が楽しい」と実感できることが、保育における運動遊びを展開しようとする意欲に繋がることを期待していることが示された。また、学生の体力、運動能力の低下やコロナ禍での運動指導などの課題に対して工夫しながら授業が展開されていることも明らかになった。さらに、運動が楽しいだけでなく、理論と実技の融合という観点の重要性も示され、実践力育成の観点から模擬保育に取り組んでいることも明らかになった。

Key words : 運動あそび、保育者養成教育、実践力育成、幼児期運動指針

I はじめに

1. 運動あそびについて

幼児期における運動遊びの意義は大きい。幼児期からの運動習慣を通して、体力・運動能力の基礎を培い、さまざまな活動への意欲や社会性、創造性を育むことを目的に幼児期運動指針¹⁾が策定され、保育・教育現場での運動遊びの推進が望まれている。運動遊びについて、保育所保育指針²⁾、心身の健康に関

する領域「健康」の中で、いろいろな遊びの中で十分な遊びの中で十分に体を動かすこと、自ら体を動かそうとする意欲の育ち、多様な動きの経験による体の動きを調整する力の育ちなど、運動遊びの意義が述べられている。

西川³⁾は、保育者は、気になる子どもに対する運動遊びを用いた支援により気になる子どもたちは気になる行動が落ち着くようになり、待つことができる等の効果を述べており、子どもの発達を促す効果は分かっているが、具体的に何をすればよいか不明かもしれないと述べている。

さらに、笹谷ら⁴⁾は、保育者の多くが運動あそび・幼児体育の指導をしており、「レポートリーの

* 四條畷学園短期大学 保育学科

** 大阪大谷大学 教育学部 教育学科

増加や幅を広げる」、「正しい技術と知識の習得」などの研修や技術の習得の希望があると述べている。

「運動遊び」に関する先行研究では、保育・幼児教育現場における指導に関する研究は多く取り組まれており、養成校教育における「運動あそび」に関する指導内容、方法に関する研究については、梅垣ら⁵⁾乾ら⁶⁾などが、筆者らが担当する授業研究として研究、報告がされている。また、今西⁷⁾は、運動遊びに関するシラバスの検討に取り組まれているが、保育者養成カリキュラムを俯瞰した研究は見られず、「運動あそび」を展開する保育実践力の育成に関する研究は少ない。

II. 研究目的と方法

1. 研究目的

本研究では、保育士養成課程において、「運動あそび」の教授内容・方法や教授する際の工夫等を調査し、現状分析を行い、「運動あそび」を展開する保育実践力の育成を目指した教授内容を検討することを目的とする。

幼児期における運動遊びの意義は大きく、保育・教育現場での運動遊びの推進が望まれている。本研究は、保育者養成教育における運動遊びの指導内容の充実により、保育実践力のある学生の育成に寄与し、さらに子ども一人ひとりに応じた「運動あそび」の展開により、すべての子どもの発達支援に寄与する研究として取り組む。

2. 研究方法

「幼児体育」「スポーツ」等の実技演習科目の担当教員を対象に、教授内容、方法、使用遊具等について、アンケート調査及びインタビュー調査を実施した。調査は、2022年9月～2023年1月の期間に実施した。

3. 倫理的配慮

本研究は、所属する四條畷学園短期大学の「教員の研究活動並びに研究倫理規定」に則

り、アンケート調査では、本調査の意義と個人情報への配慮について説明を行い、承諾を得て行い、提供された情報について、個人情報の保護を徹底し行った。

III. 研究結果及び考察（アンケート）

回答数 17（回収率 17.7%）。回答者の属性は、表 1. に示す。

表 1. 回答者の属性

所属校		保育者養成校 教員経験年数	
専門学校	2	3年未満	2
短期大学	9	4～9年	5
大学	6	10～19年	3
		20年以上	7

回答者が保有する資格については、教員免許(保健体育) 15人(88.2%)、小学校教員免許 10人(58.8%)、幼稚園教員免許 2人(11.8%)、保育士資格 4人(29.4%)、幼児体育指導者資格 4人(29.4%)を保有し、ほかに、レクリエーションインストラクター、キャンプディレクター1級、介護予防運動士、コーディネシントレーナーの保有状況が回答された。それぞれの資格は、教育・保育や「運動遊び」と関連する資格であり、養成校教員が専門性を活かした授業を展開していることが推察される。

1. 幼児運動指針について

養成校の授業における幼児期運動指針の取り扱いについては、14校(82.4%)の養成校で取り扱われており、実施コマ数を表 2 に示す。結果から、幼児期運動指針で示されている幼児期における運動の意義や重要性、多様な動きを考えるポイント、指導のポイント等について、授業において実技及び理論が指導され、保育者の運動指導の実践力につながる取り組みがなされていることが明らかになった。

表 2. 幼児期運動指針の取り扱い

全くしない	1
30分～1時間	6
1～2時間	1
2～3時間	3
3～4時間	0
4～5時間	2
5時間以上	4

2. 運動遊び実施(授業での使用遊具別状況)

養成校の授業で使用されている遊具について、保有状況（保有している、保有していな

い、借用して使用している）及び実施状況（実施している、内容説明のみ、実施していない）について、回答を得た（図 1～3.）。15 校以上の養成校で実施されている遊具は、ボール、フープ、なわとびであった。金川⁸⁾は、フープや巧技台は日常的に使用する遊具として報告しており、ボール、フープなわとびは、運動遊びで活用頻度の高い遊具であり、多くの保育現場で保有・実践されている現状を踏まえ、保育者養成校教育段階で取り組まれているものと推察する。

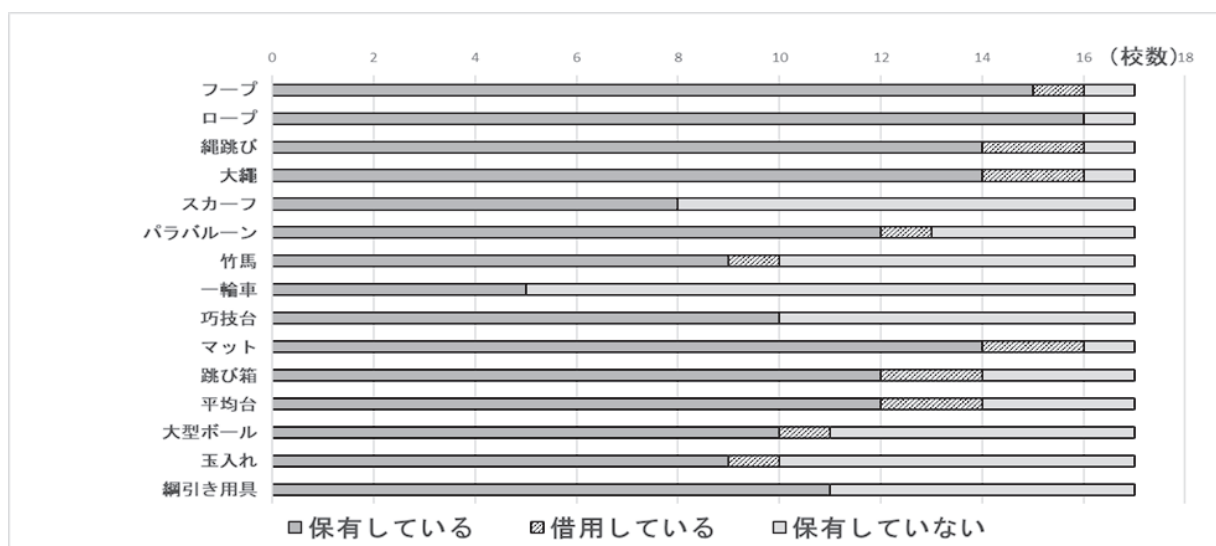


図 1. 遊具別保有状況

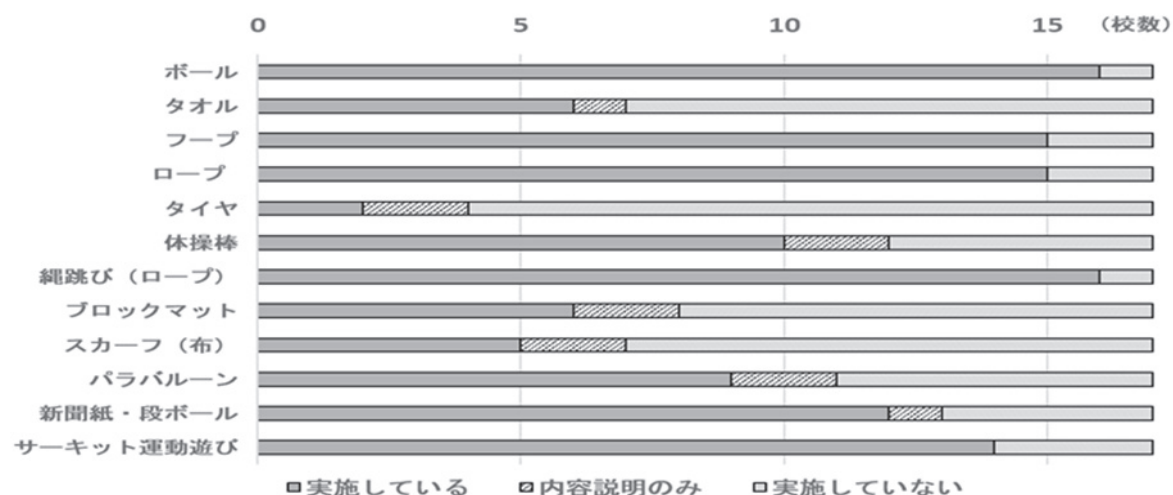


図 2. 遊具別 授業での実施状況 (1)

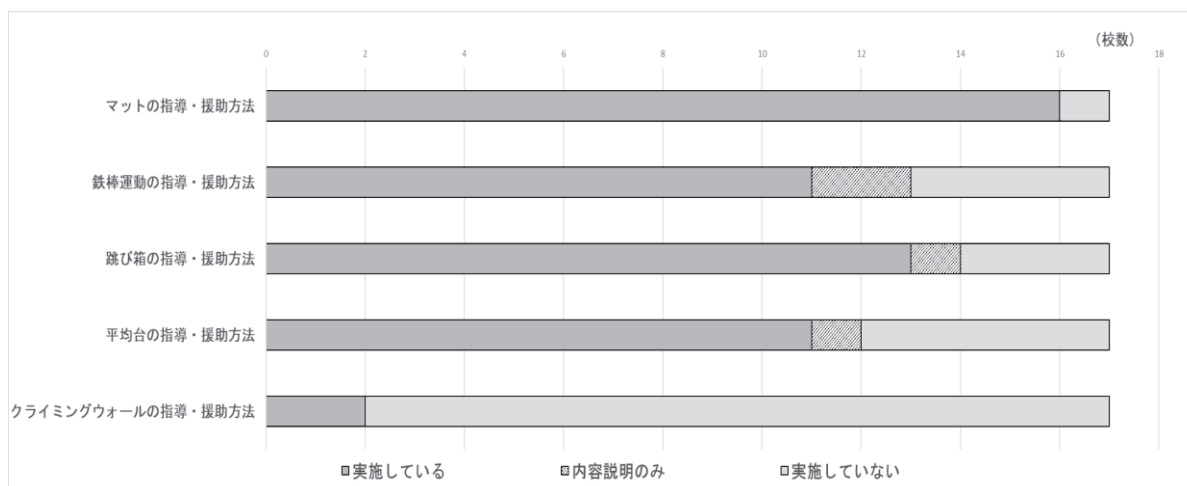


図3. 遊具別 授業での実施状況 (2)

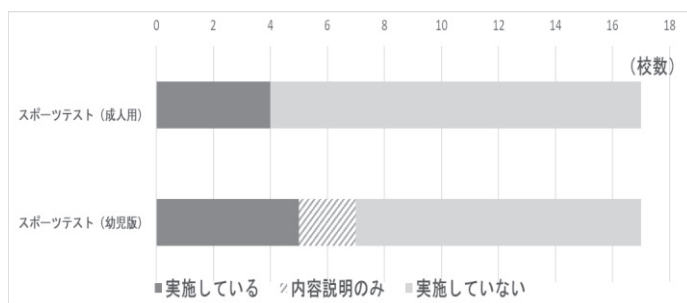


図4. スポーツテスト実施状況

3. スポーツテストに関すること

スポーツテストに関する実施状況は、図4に示す。スポーツテスト(成人用)の実施は4校であり、スポーツテスト(幼児版)は、実施と内容説明を合わせ、7校で実施されていた。

4. 模擬保育に関すること

シラバスにおける「模擬保育」の取り扱いについては、記述あり12校(70.6%)、記述なし5校(29.4%)の結果が示された。表3は、「模擬保育」に関する授業での実施状況であり、3コマ以上の時間をあてているという回答は、11校(64.7%)であった。運動遊びに関する「模擬保育」の指導に当たっ

表3. 「模擬保育」の実施状況

実施せず	3
0・5コマ	1
1コマ	0
2コマ	1
3コマ以上	11
記述なし	1

て特に重要と考える点に関する自由記述の回答をKHコードにより抽出語を検討した。結果を表4に示めす。具体的な記述では、「教材選択及び指導者としての在り方」、「指導案計画とねらい、評価が一体であるか」、「指導の仕方」、「指導経験を積むことは非常に重要なことである」、「やらせる運動遊びではなく、楽しくまたやりたくなる指導をする」、「安全性を重視した指導法」、「幼児の主体的な活動を促す」であった。

さらに「運動遊びの実際」を学ぶ機会については、9校が「実際に見学機会を設けている」、7校が「市販されている動画や撮影してきた保育現場の映像を活用」の取組が回答された。

表 4. 「模擬保育」の実施状況

順位	抽出語	出現回数
1	指導	8
2	保育	4
3	活動	2
4	経験	2
5	実践	2
6	方法	2
7	立つ	2

5. 小学校体育への連携について

「小学校体育への連携」に関する、保育者養成段階での指導については、「幼児期の運動は重要であり、そのことを踏まえて、小学校体育がなされるべきである」、「小学校体育の教材を数多く取り入れている」、「小学校での授業内容の理解」、「小学校と連携を今以上に密にし、系統だったカリキュラム作りが必要」、「0-15歳を見通した養成のための学修」、「技能の高低も考慮すべきであるが、何より『運動（遊び）が好き』という子どもを育むことが、円滑な小学校体育への接続を可能にすると考えている」といった小学校体育への連携を重要とする回答と同時に、「私立が多いので、実際に連携できているのか疑問である」、「形だけになるならする必要がない」、「幼児期の運動遊びの完成度が高度すぎると、小学校の体育種目のカリキュラムと併合性が生じる」、「小学校指導要領にある鉄棒、マットなど評価のあるものを幼児期にできるようにしておこうとしているのはまちがい」という課題提示が含まれた回答もあった。また、小学校体育との連携に関する回答には、「幼児期は遊びに徹し、体を動かすことが楽しいと思えるようにすることによって小学校体育に取り組む意欲につながると思っているので、子どもたちが運動を楽しみ思えるようにすることが大切だと伝えている」、「科目の体育に入る前、評価のない幼児期に運動が嫌いにならないように、できなくても、遅くても、運動が楽しいと思

える体験を多くさせてあげたい」という、幼児期での運動遊びで大切にすべきこと、小学校体育との違いを明確に示す内容も含まれていた。

6. 実技指導で大切にしていること

「実技指導で大切にしていること」に関する自由記述の回答をKHコードにより抽出語を検討した結果を図表 1-3-9.に示す。「担当者自身の指導時における安全管理」、「運動遊びを楽しみと感じられるようにする」、「運動が苦手・嫌いな学生への配慮」、「できる限り多くの遊びを経験」、「指導者となるための視点」、「発達段階を理解して行う」といった回答が得られた。山本⁹⁾は、保育士・幼稚園教諭・保育教諭を目指して保育の専門的な学びをする中で、総合的に保育者としての基礎的な感覚である保育観が培われていくと述べている。実技指導を行う中で「指導者となるための視点」を学生が自覚できるように大切にしながら指導することは保育者の基礎的な感覚を育てるものと考える。

表 5. 実技指導で大切にしていること

抽出語	出現回数
安全	4
楽しい	4
運動	3
指導	3
対応	3

7. 実技指導で工夫していること

「実技指導で工夫していること」に関する自由記述の回答をKHコードにより抽出語を検討した結果を表 6.に示す。「動く楽しさを体感させること」、「楽しく学ぶ」、「共に動く、共に楽しむ、仲間づくりになるように心がけている」、「大人でも楽しめるような内

容にしていること、複数の遊びを準備したり、続けて行う時はルールやチームを変更するなど、飽きないようにしていること」、「自身の状況や指導効果を理解するために、高速度カメラやその他各種測定機器を使用し、可能な限り数値化してフィードバックするようにしている」、「動きのメカニズム」、「見本や指導法・補助法」、「リターンシートとして授業振り返りシートを導入していること」、「できた・できないの評価をしない」、「指導者も一緒に楽しむ」等他、具体的な工夫が回答された。

8. 実技指導で苦慮していること

「受講学生の運動遊び経験による知見が少ないこと」、「体力のなさを痛感する」、「学生間の意欲の差、保育者になるという意識の低さ」、「受け身の学生の多さ」、「コロナ禍の中での密にならないような授業と暑さ対策」、「熱中症、ケガが起こりやすい」、「人数の多さ」といった回答が得られた(表 7.)。

9. 保育現場からの相談に関すること

保育現場からの運動遊びに関して 14 校が相談を受けた経験があるという回答が得られ、運動指導方法、内容さらに配慮児を含む指導等に関する相談内容が示された。

表 6. 実技指導で工夫していること

抽出語	出現回数
楽しい	3
動く	3
楽しむ	2
行う	2
内容	2
変える	2

表 7. 実技で苦慮にしていること

抽出語	出現回数
学生	5
運動	3
ケガ	2
コロナ	2
経験	2
人数	2
多い	2

表 8. 保育者からの相談内容

不振児の相談を契機とした相談
 家庭でどういった運動遊びが必要か質問を受けた
 指導や研修にはよく行っている。その時は、やりたいと言うけれど実際は指導に難しさを感じていると思う

IV. 研究結果及び考察(インタビュー調査)

インタビュー調査は、本研究で実施したアンケート調査回答者の中から 8 名を対象に、対象者の勤務校は、大学：(B) (F)、短期大学：(A) (C) (D) (E) (H)、専門学校：(G)であった。2022 年 12 月～2023 年 1 月に、対面形式もしくはオンライン形式により、半構造化面談で実施した。

質問項目別に回答内容を表-9. ～13. にまとめた。文中の下線部は筆者が追記したものである。以下、3 点（実技指導で大切にしていること、実技指導で工夫していること、保

育現場での「運動遊び」に関する希望について) について、まとめる。

表 9. 実技指導で大切にしていること

<p>(A)実技指導 子どもに運動遊びを指導する立場として、できるなるように指導してきたが、(例:縄とび何回、逆上がり、跳び箱できるように等)、体力、運動能力の低下なのか、けがをさせてもいけないので、今は難しくなってきた。運藤遊びが嫌いにならないようにし、また、運動嫌いな子どもを作らないように伝えながら、できたほうがよいに越したことはないが、やろうとする気持ち、やったらできたという成功体験や、できる喜びと、やろうとする気持ちを大切に、そのことが、子どもたちの保育にもつながると考え、運動嫌いを作らないことを大切にしている。失敗しても大丈夫、計画する事、汗をかく、恥をかく このことをポリシーとして、伝えている。</p> <p>(B)運動が苦手だと思う学生もいるので、楽しくできること、学生自身が運動が楽しいと思わないと、運動が楽しいよと子どもに教えられるので、楽しく行くことを心掛けている。高度なことは要求していない。指導者としての立場の意識を持ちながら、実技に取り組めるように伝えている。自分が楽しいというだけでなく、もし自分が指導者ならばという視点を持ちながら、どんな点を考えるか、工夫するか、等の言葉かけを行っている。運動中のけがが原因で子どもが運動を嫌いになつたりしないように、安全にということを注意しながら行っている。</p> <p>(C)幼児期 体を動かす楽しさ、運動嫌いを作らないために、自分自身が体を動かす楽しみを実感できるように、リスク管理配慮を伝えながら、前提として授業に取り組んでいる。日本リクレーションの課程認定を受けており、インストラクター習得できる。必要な内容を組み入れ授業を行っている。ベースはホスピタリティ。スキヤモンの発達曲線、幼児期運動指針の内容及び、保育現場の様子を伝えながら、理論と実践を組み合わせながら、授業を行っている。伝承遊び、けん玉、竹馬なども行っている。理論は、体育講義で学ぶ。1年生は実技を中心に、必要な理論を押さえながら、1年生後期は模擬保育、30分の保育計画を立てる取り組みを行っている。実習を踏まえて模擬保育、保育実践演習(総合的な内容)で、保育科運動会を行っている。得点版を作ったり、準備体操のダンスを企画したりする。実際の子どもの配慮を意識させながら、学科全体で取り組んでいる。学年を超えた交流が生まれる。2年生になれば1年生への指導を行うなど、生まれている。(D)スモールステップで行う。幼児に示すように学生に伝える。保育者マインドをオリエンテーションで伝える。保育技術よりも心を育てることを重視している。このことを意識して授業を受けるように伝えている。見本を見せながら行う。(E)体を動かす楽しさ、大切さを教えること(F)保育者が運動あそびは楽しいと子どもに伝える姿勢(G)幼児期の体力向上の必要を理解させ、また幼児期に必要な身体機能の向上を図るための基盤となるのが体力である、ということを理解させること。指導者は子どもの理解と表現(雰囲気)が大事である(H)小学校の運動領域につながるような運動を幼児期の運動あそびに取り入れる。幼児に運動の楽しさを伝えたいのであれば、学生本人がまず楽しむこと。</p>

表 10. 実技指導で苦慮していること

<p>(B)一番学生が楽しんだ活動の一例は、新聞を使った遊び。「新聞紙+ジャンケン」のゲーム。人数を増やすなど展開している。幼児なら5以下の数の理解にもつながる。新聞紙を体の前面に張り付けて走る。スーパーマンになって走る。円になって走る等他、展開すると、学生は大喜びで活動に取り組んでいる。最後には新聞紙を丸めてパンチングボールを作り遊ぶ。この活動は、小学校生活科で取り組む内容でもある。運動表現の中で、運動の指導法として取り組んでいる。(C)テキストを使用し、理論と実際行い活動を参考にしながら、実際に実践を行う。その後、ワークシートへの記入。活動内容と指導のポイントをまとめさせて、考察、まとめ、清書、提出。単に楽しかったで終わらないようにしている。このことを活かし、模擬授業に繋げている。実際5歳児に演じさせて、模擬授業を行っている。5歳児の視点が見えてくる様子がある。(D)例えば、跳び箱なら両足踏切ができないといった時には、走る運動から、躓きに応じて指導。できる学生には、どこに危険が潜むのかといったことを考えるように指導。(E)日本体育協会のACPプログラムは小学校のプログラムへの接続の視点から効果が高い。幼児体育における二つのねらい(総合運動あそび→発達発育に即した身体機能の向上、体力向上をめざす。種目運動あそび→各種目優先型の指導法の体験・完成をめざす。線上ジャンプ(I・U・S字)跳び方によって腕の使い方を考える。分身かくれんぼものを隠す対抗戦)</p>
--

表 11. 指導で苦慮していること

(B)年度によって違うが、受講人数については、30~40人が適当。40人を超えると安全確保ができないと考えている。(C)稚拙で、自立できていない、体力が弱い学生が増えてきている。暑い、寒いことに対して弱い。コロナの影響もあるのか、欠席する学生が増えている。動きが乏しい学生が増えてきているように感じる。
 (D)空調がないため、気温が高くなる時期には、運動量を管理しながら活動、技術習得を計画する。待ち順番の多い器械運動を夏場に行っている。経済的滋養により、実技時の服装について、指定のジャージがない。実習で行って運動できる服装で来るようにしているが、なかなか難しいことがある。(E)学生個々の意欲の差が大変(F)学生の体力がないこと(G)幼児体育でやりすぎに注意する(H)学生の反応のばらつき・能力(理解力)の差。

表 12. 保有する遊具・道具について

(A)跳び箱、鉄棒、マット、巧技台、トランポリンなどを使用し、幼稚園児がやってきて遊ぶのを学生が指導するような活動がある。(幼児体育以外の内容であるが)
 (B)パラバルーン。必ず実施。さいころを使って授業を展開して、子どもにも楽しい教材だと伝えている。設置している遊具はないのですが、話の中では、年長さんなら竹馬を取り組むことがあるよ、できないことはやらないようにしている。創作ダンス:表現で取り組んでいる:揺れるをキャッチフレーズに取り組む。音楽も学生はスマホを活用して3分間程度のダンス。発表会まで取り組む。自分が楽しかったら、子どもも楽しい。今の気持ちを忘れずと、伝えている。(C)パラバルーンが一番喜んで行っている。実際にやってみると、楽しさ、難しさを改めて感じる。マット、跳び箱、鉄棒は苦手とする学生が多い。(D)多様な運動遊びを考えるため、跳び箱、平均台等を使用し、サーキット遊びや運動遊びを学生に運動を考えさせる。年齢に応じた運動遊びを考えさせている。学生はドッチボールが好きです。好き嫌いの差があるが、リクエストが多い活動。パラバルーン。子どもにも人気の遊具なので。(E)フラフープ・ソフトバレーボール・ドッチビー・短なわ(持ち手なし)
 (G)走るときの腕の使い方を自然にマスターするタスキ(H)いろんな種類のボールがあること

表 13. 保育現場での「運動遊び」に関する希望について

(B)保育者の中で、子どもの運動を放任しているようなことがあるが、運動発達に関する知識がもう少しあれば、変わってくるのにと感じることがある。多忙、見取りの必要性があるので、先生の大変さも理解できるが、免許更新講習中で、投げる動作の変化を伝えたが、知らない人が多かった。タオル1本あれば、こんな遊びができるよ、と合わせて伝えたが。(C)伝承遊び、道具を使わない遊び、集団での遊びを知らない学生が増えてきている。童謡を知らない学生も増えている。コマ遊びでは、紐さえ結べない学生もいる。半数ぐらいが、コマを回せないような状態。罰ゲーム的なことをやらせて、盛り上がったというような間違っているように感じることもある。安易な罰ゲームの導入、嫌な体験の実例を伝えたり、いじめにつながる事、登校拒否、自殺などといったことになることもあるので、安易な罰ゲームには、頼らない。勝敗重視しすぎないこと、過程を重視することの大切さなどを伝えている。
 (D)体力調査の結果によると、体力は下げ止まり、投げる能力が下げ止まり。投げる動作のためにどのような遊びが必要なかなあと考えながら、学生にも考えさせている。紙鉄砲、めんこ、コマ遊びなどの伝承あそびでも投げる動作につながる。(E)先生がいろんな動きを知っている。先生が子どもたちの前で楽しみながら体を動かせること(G)保育者が運動の楽しさをつたえる。自由にみせかけて、集団のルールを学んでいく(H)子どもが自主的にあそびたがることをさらに発展させて、関連する他のあそびにつながる提案展開ができる運動へのかかわり方。例(子どもが何かこのぼりたいとうったえる→そこからさらに、レベルに応じていろんな提案ができること)

1. 実技指導で大切にしていること

学生自身が授業内で取り組む実技（運動遊び）が楽しいと実感できることを大切にしていることが示された。竹森¹⁰⁾は領域「健康」に関する授業において、園児と一緒に活動する意識が高まるような授業づくりが必要

であると述べている。保育者が運動は楽しいと子どもに伝える姿勢を育てるために、また、子どもと一緒に運動を楽しむ意識を醸成するためにも、学生が運動遊び楽しいと実感できる授業づくりが必要であろう。縄跳びや鉄棒等の技術については、できた方がよいに越したことはないが、やろうとする気持ち、

やったらできたという成功体験、できる喜び、やろうとする気持ちを重視する、高度なことは要求しない等の回答があり、学生の体力・運動能力の低下への対応が推察される。

また、授業のオリエンテーション時に保育者マインドを伝え、学生自身の技術習得よりも心の育ちを重視している回答もあった。これらの養成校教員が運動指導で取り組む姿勢は、まさに、体力・運動能力低下の課題のある子どもに対する保育者の姿勢と近似するものと考えられる。伊藤¹¹⁾は、保育者に求められる資質には保育の基本的な知識や子どもと関わる技術を挙げ、特にスキルを磨くことが必要と述べているが、「幼児体育」「スポーツ」等の実技演習科目で取り組む運動あそび・運動スキルにおいては、体力・運動能力の低下が見受けられる学生の状況に応じた指導内容の検討が必要であろう。その他、授業では、指導者の視点で取り組むこと、工夫することを考えるように、さらに、どのような言葉かけがよいのかを考えるように指導している回答もあった。また保育現場の様子を伝えながら、理論と実践を組みがあった。子どもの運動遊びの実際を知る方法として、幼稚園児が授業に参加し、学生が遊びの指導を行う取り組みも報告があった。また、資格認定と連動させ授業運営の回答もあった。

2. 実技指導で工夫していること

実技指導で工夫していることについて、具体的な取り組みの回答を得た。例えば、小学校生活科と関連させた取り組みとして新聞紙を使った活動や、養成校教員の専門性を活かした活動の回答があった。また、テキストを使用し、理論と実際の活動の融合、活動内容、考察を記入したワークシートの提出を課題とし、さらに模擬授業に関連させるような取り組みも示された。また、学生の躓きに応じた指導、安全面への説明等も指導されていることが明らかになった。これら、養成校教

員による学生への運動指導の実際を学生が経験する中で、指導者のあり方を学ぶことができ、そのことは生きた学びとして、保育実践力につながると考える。

3. 保育現場での「運動遊び」に関する希望について

運動の楽しさを伝える、先生が子どもの前で楽しみながら体を動かす、安易なゲームの導入、勝敗を重視するよりも過程（運動遊びを取り組む中で得られる楽しさ）重視するといった回答があり、「運動が楽しいこと」を子どもに実感させてほしいという、養成校教員の思いが明らかになった。また、運動発達に関する知識の必要性を指摘する回答もあった。その一つとして、投げる動作の発達の順序に基づいた指導や、伝承遊びの駒まわしの動作や新聞紙で作る紙鉄砲での腕の振りおろし動作が投げる動作につながるといったことを意識した指導、つまり子どもの動作を運動力学的に分析を意識した指導ができるようになってほしいという回答があった。

保育現場への「運動遊び」に関する希望の内容は、裏を返せば、養成教育段階で学生が修得してほしい内容と関連するものにとらえるであろう。

V. 総合考察

本研究では、「幼児体育」や「スポーツ」等の実技演習科目の授業における実技内容や実技で使用する遊具の実態及び、養成校教員が授業を進める上で工夫している点、苦慮している点が明らかになった。

文部科学省¹²⁾は、いわゆる「ゴールデンエイジ」（概ね幼児期から中学生まで）の運動習慣は、生涯にわたる体力・運動能力等の基盤となる極めて重要な要素であると述べ、幼児期運動指針やアクティブチャイルドプログラムの周知に取り組んでいる。また、大山

ら¹³⁾は、大学の講義において、「運動嫌い」「体育嫌い」の人々には、新種目の導入や楽しさ・達成感を感じられる授業を展開することが一つの重要な要素であると述べている。筆者は、担当する授業において、幼児期における運動遊びは、生涯スポーツの礎であり、保育現場での運動遊びを通して、運動を楽しむことはもちろんであるが、「運動嫌いを作らない」ことが重要であると学生に伝えている。

本研究は、保育士養成課程の「運動あそび」を教授について、「運動嫌いを作らない」を根幹に位置づけ、本研究から得られた結果をまとめた(図-5)。

1. 学生の課題について

学生の体力、運動能力の低下やコロナ禍での運動指導などの課題に対して工夫しながら授業が展開されていることも明らかになった。川上ら¹⁴⁾は、保育学生の体力・運動能力について先行研究を概観し、保育学生の体力・運動能力について、低い傾向が長らく繰り返され、保育者を志す学生の体力・運動能力が、同世代の中で平均すると低い傾向にあるのではないかと推考し、保育学生に向けた身体を動かす授業の課題として、一つは、体験を重視することにあるだろうと述べている。また、保育学生の体力・運動能力に関する課題として、中村¹⁵⁾は保育者には、子どもと共に遊ぶための体力・運動能力が求められると述べており、保育者養成校に在籍する学生は一般の学生よりもある程度高い体力・運動能力を有しているほうが望ましいとも述べている。

本研究での結果からも、学生の体力・運動能力に苦慮している回答がみられ、保育者養成校に在籍する学生の体力・運動能力の傾向が推察される。

令和4年スポーツの実施状況等に関する世論調査では、自分の体力についてどのよう

に感じているかを聞いたところ、「体力に自信がある」とする割合が45.6%とあり、年代別に見ると、20代、30代で「体力に自信がある」とする割合が高く、30～50代で低くなっていると報告されている。また、令和4年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」¹⁶⁾の結果では、1日30分以上の軽く汗をかく運動を週2日以上実施し、1年以上継続している運動習慣者の割合は、20歳以上で27.2%という報告も挙げられている。スポーツ実施状況調査の結果も含め、学生の体力・運動能力の状況を踏まえた授業づくりが必要であると考えられる。また、運動能力、運動経験の少なさ等のために、実技を行う中での安全面への配慮も重要である。また、近年、気温の上昇傾向がみられ、熱中症対策を踏まえた授業づくりも重要である。

筆者が担当する授業は、冷暖房設備がない体育館での実施であり、夏季には、気温・室温、熱中症アラート等の発令有無等を確認し、その確認内容を学生にも共有し、安全面への配慮の方法も合わせて伝えている。他にも安全面への配慮としては、服装(上着をズボンに入れることやファスナーを上げること)や長髪の学生への指導(髪を結ぶ)、付け爪、ピアス等の着脱の指導など、学生への安全確保を指導し、そのことが、保育における子どもの安全にもつながることを伝えている。

2. 運動の楽しさを大切にする

授業で使用する遊具においては、保育現場の実践を視野に入れた内容が取り込まれており、運動遊びに求められる「運動の楽しさ」「できる喜び」を学生が実感できるように工夫されていた。畑野ら¹⁷⁾は、保育者養成課程の授業の中で、学生が自ら様々な運動遊びを体験することは、保育者として子どもの遊びの姿やその関わり方、環境構成、安全

への配慮、運動遊びの大切さなどの気付きにつながり、見通しをもった保育の計画・展開ができるようになると考えられると述べている。これらのことから、授業における運動遊び体験の充実が保育実践力の育成につながることが望まれる。

3. 理論と実践の融合

さらに、（運動が）楽しいだけでなく、理論と実技の融合という観点の重要性も示され、実践力育成の観点から模擬保育やワークシートの導入などにも取り組んでいることが明らかになった

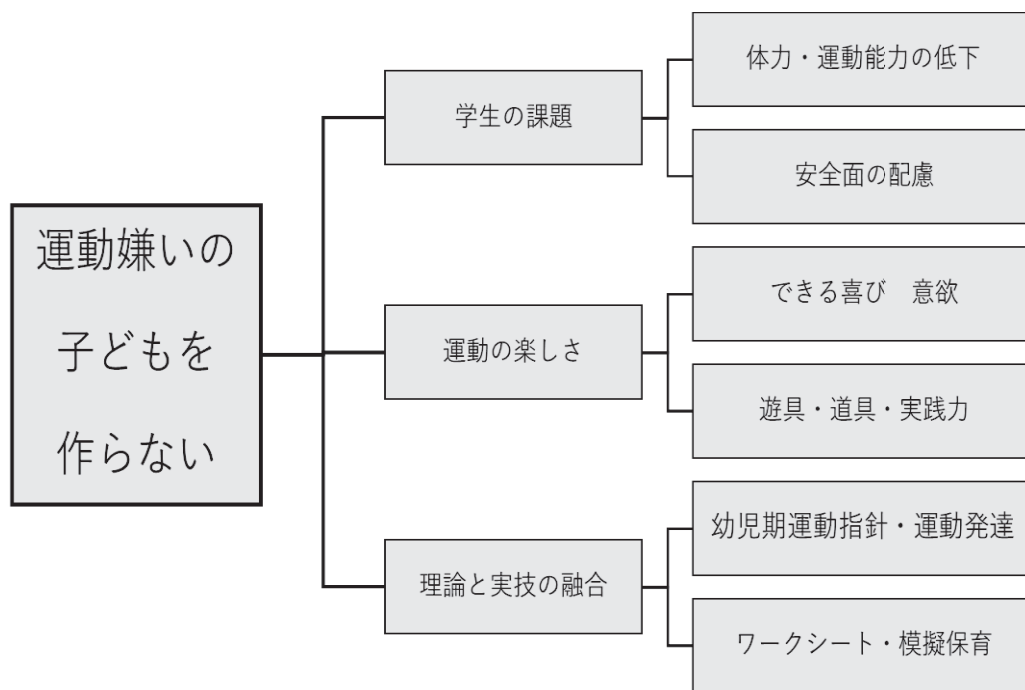


図5. 本研究のまとめ：養成校教育における「運動あそび」の教授のあり方

引用文献

- 1) 幼児期運動指針ガイドブック, 2012, 文部科学省, mext.go.jp, 最終閲覧 2023.11.05.
- 2) 保育所保育指針. 平成 29 年 03 月 31 日厚生労働省告示第 117 号, mhlw.go.jp, 最終閲覧 2023. 11. 04.
- 3) 西川ひろ子, 2019, 保育所における気になる子どもへの保育士が行う運動遊びを用いた支援と課題, 安田女子大学紀要 47, 143-154.
- 4) 笹谷絵里・荒木慎太郎・山本清文, 2021, 保育者の運動遊び・幼児体育に関する研究, 花園大学文学部研究紀要 53 号, 111-124.
- 5) 梅垣明美・晴山紫恵子, 2006, 体育における保育者養成教育プログラムの検討, 浅井学園大学短期大学部研究紀要 44, 55-64.
- 6) 乾 多慶士・中村 泰介, 2018, 本学幼児教育学科における「体育（運動あそび）」の実践報告, 園田学園女子大学論文集第 52 号, 137-142.
- 7) 今西香寿, 2017, 保育者養成におけるシラバスに見られる運動遊びに関する指導内容, 大阪千代田短期大学紀要, 103-113.

- 8) 金川朋子, 2021, すべての子どもへの運動あそびを通じた発達支援に関する一考察 : ムーブメント教育・療法に関する研修アンケート結果の分析一, 四條畷学園短期大学紀要 54, 11-22.
- 9) 山本佳子, 2017, 保育者論が学生の保育観にどのような変化をもたらしたか中国学園紀要 16, 205-211.
- 10) 竹森裕高, 2023, 西九州大学短期大学部紀要 53, 1-7.
- 11) 伊藤照美, 2022, 保育士養成校における幼児体育指導に関する実践報告ー身体表現における社会人基礎力の育成についてー, 愛知学泉短期大学紀要 4-2, 149-157.
- 12) 令和4年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果,
https://www.mext.go.jp/sports/content/20221223-spt_sseisaku02-0026462_25.pdf,
最終閲覧 2023. 11. 03.
- 13) 大山綾花・石澤伸弘, 2021, 大学の講義におけるニュースポーツの現状と課題, 北海道教育大学紀要(教育科学編) 第72巻第1号, 527-536.
- 14) 川上暁子・増田未来他, 2017, 保育者養成のための身体を動かす授業を考える1ー保育学生の体力・運動能力調査に関する先行研究の把握ー, 武蔵野教育學論集(1), 21-31.
- 15) 中村真由美, 2023, 保育者養成校学生の体力に関する調査ー領域「健康」の視点からー, 清泉女学院短期大学研究紀要(39), 55-62.
- 16) 文部科学省, 令和4年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」の結果について, [mext. go. jp](https://www.mext.go.jp), 最終閲覧 2023. 11. 05.
- 17) 畑野裕子・阪江豪, 2019, 保育者養成課程における運動遊び経験の特徴とその学習指導内容の在り方に関する一考察, 教職課程・実習支援センター研究年報 2, 119-127.

附記

本研究は、令和4年度全国保育士養成協議会近畿ブロック研究助成を受け実施している研究の一部です。

ー11月6日受稿、11月17日受理ー